

出口治明さん連続講義

「古典を読めば、世界がわかる」

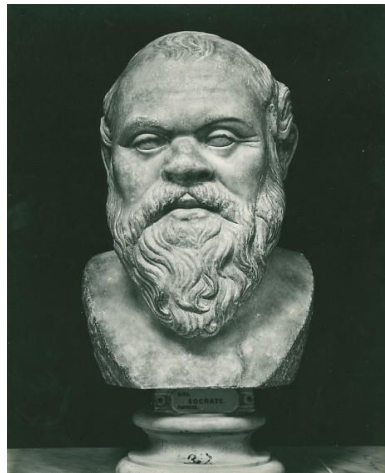
第2回 2018年11月8日



『ソクラテスの弁明』

プラトン

(納富信留訳、光文社古典新訳文庫)



ソクラテス



プラトン

街角で人々と「徳」について対話を交わす毎日を送っていたソクラテスは、70歳になったB.C.399年に、それまでの言動が公共への不正にあたるとして「不敬神」の罪で告発される。告発したのは、政治家アニュトスと弁論家リュコンを後ろ盾とする若い詩人メレトス。ソクラテスは、裁判員たちに自らの罪状への弁明を述べた後、有罪の評決を受け、刑罰をめぐる2度目の投票によって死刑が確定した。屋外で行われたこの裁判において、ソクラテスはどんな弁明をしたのか。立ち会ったプラトンはその内容を再現する。ソクラテスは、メレトスとの対話を通じ、自らの考えをあきらかにしていく。人にとって徳とは何か、知恵とはなにを意味するのか、人々の心にある妬みやうぬぼれ、物事について知っていると思っている人と知らないと思っている人との違いなどを鋭く指摘した。プラトンは事実をそのまま書き留めたのではなく、自身の視点を通じて哲学のあり方を示す内容としてまとめている。

ソクラテス略年譜

- B.C.469年 アテナイに生まれる。父は石工あるいは彫刻家、母は助産婦とされている。
- B.C.432年 ポテイダイアの包囲戦に参加。
- B.C.415年 この頃プラトンと知り合う。
- B.C.406年 政務委員会の執行委員を務める。この時アルギヌサイ沖の海戦で10人の将軍が漂流した部下を放置した責任を問われ、帰還した将軍たちは一括して裁判にかけられたが、ソクラテスはその措置が違法であるとして反対した。
- B.C.404年 親スパルタ派30人の独裁政権が樹立し、ソクラテスはサラミスのレオンを連行するよう命じられるが拒否。
- B.C.399年 不敬神の罪で告発され、裁判で死刑判決が下る。1ヶ月後の3月に刑死。

プラトン略年譜

- B.C.427年 アテナイに生まれる。両親ともに名家出身。
- B.C.415年 この頃ソクラテスと知り合う。
- B.C.399年 ソクラテスの死後、アテナイを逃れ各地を遍歴。
- B.C.393年 この頃『ソクラテスの弁明』『クリトン』『プロタゴラス』『ゴルギアス』など「ソクラテス的対話篇」と呼ばれる作品を執筆したと考えられている。
- B.C.387年 南イタリアのタラスでピュタゴラス派のアルキュタスと出会う。シチリア島シラクサでは、青年ディオオンと出会い、以降密接な関係が続く。アテナイに帰国し、郊外にアカデメイアの神域に同名の研究教育機関を開設(529年まで存続)。この後20年ほどここで研究教育に専念。『パイドン』『饗宴』『ポリティア(国家)』など「イデア論的対話篇」と呼ばれる主要な作品を発表。
- B.C.367年 17歳のアリストテレスがアカデメイアに入学し、プラトンの弟子となる。ディオオンに招聘されシラクサに滞在するが政争のため1年あまり監禁される。帰国後、アカデメイアでの研究教育活動を再開。『ソフィスト』『政治家』『法律』などの作品を執筆する。
- B.C.361年 再びシラクサに招聘されるが、再度監禁される。翌年帰国。
- B.C.347年 死去

出口治明さんが選ぶ「あわせて読みたい」BOOK GUIDE



『ギリシア哲学者列伝』(上・中・下)

ディオゲネス・ラエルティオス／加来彰俊訳(岩波文庫)

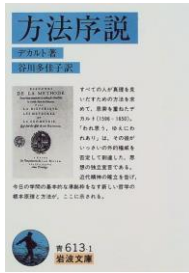
タレス (B.C.624 年頃～546 年頃) からエピクロス (B.C.341 年～270 年) まで古代ギリシアの哲学者 82 人の生涯とその学説をまとめたもの。哲学者に関する豊富なエピソードからはそれぞれの人となりがいかがやき浮かぶ。序章ではギリシアで哲学がどのように生まれ発展してきたかを解説。ソクラテスは頑強で戦地に赴いた際も泰然としていたことや物欲や金銭欲に乏しかった様子のほか、多くの言行を紹介している。文章表現が豊かで詩作に励んでいたがソクラテスと出会い、弟子入りしたプラトンのエピソードからは、禁欲的で、あまり社交的ではなかった様子がうかがえ、著作や学説についても解説している。ソクラテスとプラトンは、上巻に登場。ほかにソクラテスの弟子クセノポン (上巻) や、プラトンの弟子アリストテレス (中巻)、ピュタゴラス (下巻) も取り上げられている。



『プラトン『国家』——逆説のユートピア』

内山勝利(書物誕生 あたらしい古典入門／岩波書店)

『国家』を解説するにあたり、著者はまずプラトンの生涯を紹介。名家の出身でもとは政治家を志していたが、愚直なまでに自分の正しいと思うことを貫くソクラテスの姿に感銘を受けて弟子となる。その後ソクラテスの死に大きな衝撃を受けたことから、彼の興味は「正しい政治のあり方」へと向かう。『国家』はソクラテスを主人公とした問答形式で、「正義というのは、人間としての善さ(徳)のひとつ」とするソクラテスに対して、「<正しいこと>とは、強い者の利益にほかならない」と主張するトラシュマコスが登場。ソクラテスは、トラシュマコスとの対話を重ねた後、国家のあり方や政治家の資質へと議論を繋げていく。女性に参政権がなく教育も受けられなかった時代に、男女役割の同等性についても述べている点にも注目。



『方法序説』

デカルト／谷川多佳子訳(岩波文庫)

幼い頃から「小さな哲学者」と呼ばれ、数学も得意としていたデカルトが、理性を正しく導き、学問において真理を探求するための方法を説いた著作。理性は、人間を人間たらしめるものであるはずだが、人間は何が正しいかを知っているわけではない。すぐれた精神の持ち主たちによる哲学にも論争は絶えないが、デカルトが研究を続けていくなかでわかったのは、運命よりも自分に打ち克つように、世界の秩序よりも自分の欲望を変えるように、つとめること。必然を徳とすることで、何かがあっても残念だとは思わなくなるのだ。人は正しさのみに生きるわけではないが、それならなぜわたしはわたしであるのか。そうした考察から「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する〔ワレ惟ウ、故ニワレ在リ〕』という真理を表明する。



『君たちはどう生きるか』

吉野源三郎(岩波文庫)

中学2年生のコペル君とお母さんの弟で大学を出て間もない法学士の叔父さんとが、生きていくなかでの疑問や葛藤について語り合う。地球が宇宙の中心であり天が動いていると考えるのか、広い宇宙の中の天体の一つに過ぎないと考えるのか。それはすなわち人間の存在、自分自身の身の置き方にもつながる考え方であることを、叔父さんはコペル君に告げる。正義とはどうあるべきか。勇気とは何か。過ちを犯し自らを責めるしかない時、どう立ち直ればいいのか。感謝することは、「お礼を言うだけの値打がある」からではなく「めったにあることじゃあない」、つまり偶然に感謝するという意味だ。そんな対話の繰り返しの中で、まさに「どう生きるか」を問いかけている。



『社会心理学講義 〈閉ざされた社会〉と〈開かれた社会〉』

小坂井敏晶(筑摩書房)

フランス国立社会科学高等研究院を卒業し、現在はパリ第八大学心理学部准教授である著者は、まず学問においても政治においても中立な立場は存在せず、客観性の追求は、主観性の絶え間ない相対化の努力に支えられると説明。それをどれだけ自覚的に行えるのか。学問で最も重要なことは新しい知識の蓄積ではなく、当たり前だと普段信じて疑わない常識の見直しだと断言する。それがどれだけ難しいことなのか。人間の行動を律するのは、意識ではない。そもそも意識は社会のあり方に応じて形成されるものなのだ。その社会にも普遍的価値は存在しない。人間の行動はどのように説明すればいいのか。多くの実験データや文献を引用しつつ解説する。

編集部より

動画のご視聴をありがとうございます。

今後のイベント情報など、以下のページにて発信しております。どうぞよろしくお願いいたします。

<https://honsuki.jp/deguchi>

また、ご意見・ご感想など、以下のアドレスまでお送りいただけますと大変嬉しいです。今後の参考とさせていただきます。

salon@gr.kobunsha.com

光文社新書編集部
Web「本がすき。」編集部